第八部　傷は癒えず

北林余志子

第一章　米軍のヨコハマ進駐

1　恐怖と狼狽の街

敗戦の直後から約七ヵ月ほど、私は外務省外局の終戦連絡委員会横浜事務所に、臨時タイピストとして勤務しました。

私は外務省には別に何の関係もないんですが、十八歳の時から十年あまりも、横浜や東京で、イギリス、アメリカ、ドイツなど色んな外国商館でタイピストをしていたので、その経験をかわれたわけなのです。

昭和二十年八月三十日、厚木に着陸した連合国最高司令官一行は、そのまま厚木街道の

軍用道路を通って横浜に進駐して来ました。マッカーサー元帥の宿舎は、山手のライジング・サン石油（オイル）の支配人邸が準備されてあったのですが、元帥はホテル・ニュー・グランドに入り、九月十七日に東京のアメリカ大使館へ移るまで、ニュー・グランドにいました。ほかの将官たちも一緒だし、税関にも近いので多分そうなったんだろうと思いますが、後にアイケルバーガー中将が、ライジング・サン支配人邸に入り、ずっとそこにいました。税関とホテル・ニュー・グランドを中心に大桟橋付近いったいは、ほとんど日本人立入禁止のアメリカ軍基地の中心部になったわけです。

アメリカの艦隊は二十八日頃から港外に停泊していました。まるで観艦式のようで、山手から根岸の丘、野毛山公園、高嶋山など、それを見物する人々の山で、時ならない賑やかな光景を現出しました。

「畜生、口惜しいなァ。」

と唇を噛む悲憤慷慨型もあれば、

「なあに、そのうちみんなそっくり貰っちゃうさ。」

などと笑っている楽天家もあり、男たちに混って好奇心に眼を輝やかせて見入る若い娘たちの姿も沢山ありました。

今になって考えれば、誰も彼もが、まだ「敗戦」というものがどんなものか、その本当

の意味も形も知らない、無邪気な人達だったわけです。

九月二日、ミズリー号で調印は型通り無事に済んだわけですが、いわばそこまでは国家と国家の公的な折衝です。翌日から横須賀に上陸した占領軍が、毎日毎日引続いて横浜へ進駐してきたんですが、これで市民とアメリカ兵が、じかに対決することになり、この時から街は、無気味な灰色の恐怖におおわれてしまいました。

「敗戦」とはどういうことか、身を以って思い知らされることになったのです。

八月十五日の天皇の「敗戦放送」の直後から、もう街の一部では明らかに動揺を起していました。もし米軍が上陸すれば、日本軍は一戦を交える。そうなれば横須賀・横浜は当然戦場になるから、今のうち避難する者は避難した方が好いだろう。などと真剣にいいふらして歩く者などがいて、杉田、磯子、根岸あたりの海岸沿いの地区ではみんな本気になって疎開を始める人達もありました。

神奈川県庁でもいろいろ心配したようです。たとえ戦争にならず、アメリカ軍が平和に進駐してくるにしても、横浜が基地になるとすれば必ず色んな問題が起ってくるだろう。殊に長い間最前線で烈しい戦闘を続けてきた兵隊たちだから、気持も荒れているし、生理的にも動物的になっているだろうし、どんな不測の事態が発生するか解ったものではない、

というので、女子事務員たちには臨時休暇を与えて市外に避難をすすめ、県下各女学校には、校長が必要と認めた場合には、授業は休止してもよろしい、という通達を出しました。

「アメリカは文化国家だ。野蛮な日本の兵隊とは違う。乱暴なことなどするはずがない。」

という意見もないではなく、その通達を行きすぎだといって非難する声も一部にはあり、あわてて避難を始めた若い娘やその親達を説得にまわる人達もありましたが、大部分の市民、殊にアメリカ軍進駐の沿道に当たると思われる杉田・磯子地区では、どんどん避難を始めました。

私どもは五月二十九日の大空襲で山手の家を焼かれ、磯子の知人の家の離れを借りて間借り生活をしていましたので、当然その騒ぎに巻き込まれたわけですが、実をいえば、避難する人達を説得にまわった組で、

「まさか平和に進駐してくるアメリカ兵が非戦闘員である市民に乱暴をすることはあるまい。もう戦争は終ったのだし、何も心配することはない筈だ。」

と考えて、呑気に構えていたのですが、それがいかに甘い考え方だったかは、後になって嫌というほど思い知らされたわけです。

杉田から金沢、追浜にかけては軍需工場が沢山ありました。これ等の工場は終戦と同時にほとんど閉鎖されていましたが、いよいよアメリカ軍が進駐してくると決ると、工場の

重要書類などは焼却し、工員――大部分は徴用工――は全部解雇し、勤労動員の女学生や、女子挺身隊の女工員達には工業用の青酸カリを少量ずつ分配して、

「こと此処に到ってはもはや諸君の生命も貞操も、諸君自身の手によって処理する以外、国家も軍隊も警察も、誰も諸君を保護し防衛してくれるものはないのである。万一の場合はいさぎよく自決して、大和撫子の誇りを守って貰いたい。」

などと、声涙共に下る式の大演説をやった工場長もあったという話です。

横浜市の九〇何パーセントあまりが焼払われ、波止場付近のビル街の一部をのぞいては、この磯子・杉田が焼残った唯一の地区で、罹災市民の大半がこの地区に集っていたのですから騒ぎは大変でした。私の住んでいた付近の人達も、若い娘は顔に鍋ズミなど塗って殊更に汚い服装をし、大きなリュックをかついで、母親と手を取り合って逃げ出していく。そんな行列の通ってゆくのを見送りながら、心の中でその狼狽ぶりを笑っていた私たちは、確かに甘かったといえます。

2　不法行為の頻発

九月三日、米軍は横須賀から追浜、金沢、杉田、磯子を通って、市街中心部へ進軍して来ました。

私は部屋の廊下に立って、その堂々たる行進を見ていました。少し高台になっているので、眼の下を通って行くのが良く見えるんですが、気持は案外単純でした。

むろん全部機械化部隊で、最初にジープが数台いき、これは白いヘルメットでしたから今考えるとMP部隊だったかも知れません。

それから戦車。水陸両用のアンフィビアン。装甲車に銃をかまえて直立している武装兵の姿は、何だか観兵式か閲兵式を見るような美しさがあって、ポカンとした気持でこの堂堂たるパレードに見とれていました。

行進は時々途切れましたが、幾つもの部隊が後から後から無限に続くようでした。

行進の途切れを待って、私は小雨が降ってきたので傘を持って買物に出て行ったのですが、その帰り道に、下のOさんという方の家の前にジープが止って、アメリカの将校らしいのがOさんと何か話しているのが見えました。通りに向って粗末なガレージがあり、中

にある自動車を指しているので、自動車を貸せといっているんだ、とはすぐ解りました。

私が通りすぎようとすると、その将校が、

「あなたは英語が喋れるか？」

と声をかけたので、うなずくと、

「この自動車を使用するからこの男にそう伝えてくれ。」

というのです。

Oさんは迷惑そうな顔をして、断りたいといいましたが、とても取合ってくれません。

それでも一応受取りにその将校の名前を書いて貰い、Oさんの家の若い人が一人乗って、相手の部隊まで行くことにして、兎も角も責任の所在だけは明らかにしましたが、話が解ると将校は、

「大変有難うございました、奥さん。」

といって煙草（キャメルでした）を一箱出しましたが、こんな場合に物を貰うのは面白くないと思い、本当は大変欲しかったのですけれど、「ノー、サンクス」と断ってしまいました。

割合にちゃんとした英語で、態度も失礼ではないし、その時はわりによい印象を受けたので、

「やっぱりアメリカさんだな。」
と実は感心したくらいでした。
しかし、実際はこの進駐最初の日から既に不法行為は起っていたのです。二三日たつと、もう終連事務局へはどしどし報告が来たのでした。
自動車を持って行かれた件では、この日から十月迄に横浜市内で二十六件、市外で六件、計三十二件。
最もひどい例をあげると、九月十九日にビュイック一九三六年型乗用車を持って行こうとしたので、証明を求めると、次のようなことを乱暴な走り書きで、手帳の端切れに書残して行ったのがあります。

One car (Buick)
Model "1930". To be used by U.S.Gov. for purpose of transporting high ranking officer's on official business. After all who won the war you or me? This cirtified that this car is to be used to pick up any girl who fuck and furthermore who cares what hell is it to you.

G. I. Johpha (signed)
17—fort soldiers of the winning army, U. S. A.
on this date 19. Sept. 1945.

アメリカ軍の高級将校が公用で乗りまわす為に、アメリカ政府が使用するものなり。
一体、この戦争に勝ったのは、お前か、俺様か、どっちだと思ってるんだい？　この自動車は、ファック（交接を意味する最も下品な言葉）する娘を探しまわる為に使うし、またお前にどんな災難が振りかかろうと、俺（おい）らの知ったこっちやァねえ、ということを証明するものなり。

兵隊　ジョファ　某。

アメリカ戦勝軍、一七—部隊
一九四五年九月十九日

この思いあがった、日本人を小馬鹿にしたやり方はどうでしょうか。
二ヵ月間に三十二件といえば二日に一件ですが、自動車の少い当時の日本の状態を考えれば、この数字は横浜中の自家用自動車は全部持っていかれたと見るべきでしょう。
横浜市民にとって、これがまず最初の受難だったわけです。Oさんの自動車は、むろん取上げっ放しで、何処（どこ）でどうなったか行方も解らなくなってしまいました。
原子爆弾こそ投下されませんでしたが、六〇〇機にあまるB29の絨緞爆撃（カーペットボム）で、九〇何パ

ーセントも焼払われた横浜の都心は、それこそ「死の街」でした。

焼残ったほんの僅かの部分、波止場に近い税関に入った米軍総司令部では、将校はみんな泊り込みで、全くの休みなしの一日二十四時間勤務、完全な戦闘態勢です。従って私たちの終連事務局も朝八時から夜九時迄の十三時間勤務。特別の用がないかぎり、私などは夕方五時にバスで家の付近まで送って貰っておりましたが、局長以下幹部の方たちはほとんど泊り込みも同様にして、何時米軍から電話があっても即座に応対できるようにしていました。要するに、日本人は「終戦」のつもりで一応のん気になっているのに、アメリカ人は誰一人「戦争が終った」なんて考えている者はなかったというわけでしょう。

この税関や県庁、そしてマッカーサー元帥以下首脳部の宿舎に当てられたホテル・ニュー・グランドなどのビルディング地帯をのぞけば、あとは見渡すかぎりの荒蓼たる焼野原で、そこへ米軍の兵舎やかまぼこ小屋があちこちらへ建てられて、兵営（キャンプ）が設営されました。

その広い焼野原のそこここに、ひとかたまりずつ作られた部隊の兵営（キャンプ）の間に、焼け出されたまま行き所のない横浜市民の一部が住んでいた。こわれかかった防空壕の屋根だけつけた壕舎や焼けトタンと焼材木の素人造りのバラックが、ポツリポツリと並んでいる。夜にでもなれば、キャンプから洩れる自家発電の電燈とアメリカのラジオ音楽のほかは、灯りひとつない、音ひとつ聞えない、という当時の横浜の風景を想像に描いて頂かないと、

それ以後に起った色んな事件が良く分って頂けないかと思うのです。

街路で突然意味なくアメリカ兵のためになぐり倒される日本人。

白昼ピストルで強迫され、腕時計や財布を巻上げられたり、屋内に侵入して金庫を破られ、財産全部を強奪されたり、そしてもっと悲惨なことには若い人妻が凌辱され、清純な娘が処女を蹂躙され、……等々の事件は各所に起って、横浜は「死の街」から、それ以上の「地獄の街」になってしまいました。

事件の中、警察に届け出のあったものは、警察本部から終連事務局へ、その聴取書と共に報告がありますので、それをすぐ翻訳して米軍へ報告するのですが、私はそのタイプの仕事をほとんど一人で専門にやっていたので、これ等のアメリカ兵不法行為については、誰よりも良く知っている、と思います。

最初は、こんなものの統計など取る気持はなかったのですが、日を追って報告が重ってくるとともに、さすがに私も腹が立ってきて、別に上からの命令でもなかったのですが、仕事の余暇をぬすんでこれらのアメリカ兵不法行為のリストを作ってみました。

終連事務局も開設当時は、二世の娘さん二人と、サンモール学院出身のO嬢など四人でタイプの仕事をしていたのですが、米軍の方に優秀なタイピストがいなかったため、次々と司令部の方へ引抜かれ、あとには外国商館や正金銀行に働いたという経験のある若い娘

さん達が入ってきたので、自然私が一番の古参者になってしまったのですが、男の事務官たちは、私がこの事件の仕事にばかり掛り切りになっているのを喜ばず、

「主任（チーフ）タイピストがそんな下らん仕事ばかりやっていちやァ困る。」

とよく文句をいわれましたが、私は、

「この仕事以上に重要な仕事があるんですか？　支那人の配給や、銀行をキャバレーに使うための申請書のタイプなんか、私はごめんです。」

と突っぱねて、こればかりやっていましたが、局長の鈴木公使だけはこの仕事の重要性を認めていらっしゃったようで、リストを作った時などは、

「よく作って下さいました。」

と褒めて頂きました。

リストは米軍が厚木と横須賀へ進駐してきた直後から十月末日迄のもので、横浜市内の外に県下の分もほんの少し入っています。

これはすべて警察に届け出があり、終連から米軍へメモランダムの形式で「御考慮をお願いする」ために提出されたものだけですから、届け出のなかったものはその数倍にも——殊に若い娘の凌辱事件などは、数十倍にものぼっていることと思います。

次にその大略を記します。

事件の大別

	白人兵	黒人兵	計	屋内	屋外
殺人	四	○	四	九五件 二八二、四九八円七八銭	一四〇件 三〇、八八八円八六銭
強姦	二一	八	二九		
傷害殴打	四〇	○	四〇		
金銭強奪	二〇八	二七	二三五		
時計その他	五二〇	三二	五五二		
自動車	三二	○	三二		
警官サーベル	五三	○	五三		
その他の暴行	一二	○	一二		
合計	八九〇	六七	九五七	三〇三、三八七円六四銭	

いきなり殴られて、時計や万年筆を奪われた事件が、二ヵ月で五五二件というと、一日に二十件足らずは起っているわけですから、うっかり街を歩いてもいられない。財布を取られ、現金を奪われた金額が、街路で二万八百八十八円八十六銭。屋内へ侵入してきて奪ったのが二十八万二千四百九十八円七十八銭。まだインフレになる前ですから、七十八銭

なんて端銭が出ているのですが、この合計三十三万三千幾らという金は、あれから三百倍以上にも物価のあがっている今日の貨幣価値に換算したら、九千万円からちょっと一億円という数字になります。これはほんの二ヵ月だけのことで、こんな状態が少くとも六ヵ月以上は続いたのです。戦災でほとんど全財産を失った横浜市民が、その上に何の理由もなしにこんな莫大な現金を奪われ、独立国家になった今日になっても、アメリカからも日本政府からも、賠償はむろんのこと何の保証も得ていないのですからやりきれません。時計と万年筆だけでも一日に約二十件です。これを金額にしたら相当の損害でしょう。

しかし、そんな物質的な損害などは、どんなにも我慢するとして、我慢するにもどう我慢もできない悲惨な被害は、婦人に対する凌辱事件です。

凌辱事件は普通の場合でも被害者が警察へ届けることの非常にすくないものです。むろん被害者やその縁故者の名誉をおそれるからで、そのため泥棒に入った犯人が、犯罪の届出を妨げるという目的のためだけに、わざわざ婦人を凌辱していく、ということもあるそうですが、横浜の場合は、相手が勝利者の軍隊だし、殊に非公式にしろ、県庁から婦女子の避難のすすめもあった事ですから、ほとんど大部分の被害者は泣寝入りか、故意に事実をかくしていたと見るべきで、特に被害者が病院へかつぎ込まなければならない程に、酷い負傷をしていたとか、現場が第三者の眼にふれて、目撃者が警察へ訴えたとか、という

場合だけが、僅かに警察に届けられたと見るべきです。

その公式に届け出があったものだけが、前記のように二ヵ月で二十九件ですから、平均二日に一件。事実がその数十倍とすれば、毎晩横浜のどこかで、数人の婦人がアメリカ兵に凌辱されていた、と考えても決して間違いではないでしょう。

むろん当時は一切外部への公表は許されませんでした。厳重なプレスコードがあり、新聞記者にも秘密にしていましたし、うっかり喋ろうものなら、占領政策違反とか、米軍非協力とかいって、たちまち重労働何年ということになりますから、誰も固く口を閉じていました。

米軍首脳部は、この事実を日本人に知られるよりも、日本の新聞を通じてアメリカ本土の人達、ことにわが子や我が良人を日本に送っている兵隊の母や妻や恋人たちに知られることをおそれていたのです。アメリカ本土に居る銃後の米婦人は、強姦兵や追剥兵を、みんな品行方正で忠勇義烈な、模範的な英雄だとばかり教えこまれていたんでしょうから。

――腹が立つより、むしろそんなアメリカの婦人達が気の毒に思えたくらいです。

普通の場合と違って、兵隊の特色は、強姦にしろ追剥にしろ、大抵は集団の形式をとっていることです。追剥や泥棒は集団だろうと個人だろうと、被害者にとって、そう大きな違いはないでしょうが、婦人が暴力で肉体を犯される場合、集団凌辱ということになると、

これは意味が違っています。いわゆる輪姦で、これは単に一人の女が一人の男に肉体を汚されるという事とは全く違った、別の大きな侮辱です。これはオモチャにされることであり、見世物になることであり、人間の尊厳を冒瀆する、恐しい神への嘲笑で、到底、女として堪えられる事では断じてありません。

勝利者とは、そんな冒瀆をも許される全能の悪霊だとでもいうんでしょうか。

被害者はその後、その為に堕落した方もあるでしょうが、そんな悪夢は振り捨てて、今は新しい生活に入っている方もあり、理解ある配偶者を得て幸福に暮していらっしゃる方もあるでしょうから、その方々の御迷惑をお察しして、場所もお名前も一切匿名に伏せて置きますが、私が取扱った事件のうち、二つの例をあげてみましょう。

第二章　貞操の蹂躙

1　輪姦された人妻

吉見ヤエ子さん（仮名）の場合

ある技術部隊の兵舎の近くに起った、こんな事件の報告があります。

吉見ヤエ子（仮名）という二十五才の人妻がその被害者です。

良人の健二郎さん（仮名）は、或る工場の工員ですが、その晩は夜業があって留守でした。家には年寄りの御両親と、幼い子供二人、ヤエ子さんと留守番をしていました。

真夜中の十二時に、突然二人のアメリカ兵が、戸を破って入ってきました。むろんバラックですから、強く蹴ればすぐ破れる粗末な戸です。

物音に眼をさましたヤエ子さんは、幼い子を抱きしめ、恐怖に小さくなっていると、兵隊の一人は、窓に下っていたカーテンを引きちぎり、それに火をつけて、灯りの代りに近りを照しながら見廻しました。せまい部屋ですから、どんなに小さく身をちじませていても、直ぐに発見されてしまいます。

兵隊はヤエ子さんの姿を見ると、いきなり腕をつかんで引起しました。

「何をなさるんですか？　何か欲しいものがあるんなら、何でも差上げますから、子供に怪我をさせないで下さい。」

ヤエ子さんは子供をかばいながら、そういったのですが、むろん言葉は通じません。兵隊は子供を突きとばして、ヤエ子さんだけを戸外へ引きずり出しました。

「離して下さい。お願いします。」

身をもがいて哀願しても、相手は力の強い大男で、しかも二人です。抱きすくめられて、軽々と道路の方へ運ばれてしまいました。

大きい方の子供と老母とが、それを追って飛び出し、大声で、

「誰か来て下さい。助けて下さい。」

と叫んだのですが、隣りの家は離れているし、誰も助けに来てくれる人はありません。

ヤエ子さんを抱いて二人の兵隊は、広い道をどんどん兵舎の方へ行きます。

ヤエ子さんは必死で身をもがきました。その時、四人の兵隊が兵舎から出てきましたのでヤエ子さんは大声で救けを呼びました。

ところが、出てきた四人の兵隊は、ヤエ子さんを助けるどころか、二人の兵隊に手をかして、ヤエ子さんを兵舎に担ぎ込みました。

それからどんな事が起ったか、いう迄もありません。ヤエ子さんは、その六人の兵隊にかわるがわる凌辱されたのでした。

夜の明ける前に、ヤエ子さんは二人の兵隊に運ばれて、家へ帰されましたが、怪我と出血のため、ほとんど半死の状態になっていたという事です。

病院へ入院しなければならなかったので、事件は警察に報告されたのですが、恐怖と暗闇のため、相手の兵隊の人相が解らず、MPの協力で幾人かの被疑者があげられたのです

が、遂に犯人を指摘する事ができなかったのは残念です。

山本和子さん（仮名）の場合

黒人部隊のキャンプの近くで起った和子さんの場合。和子さんの良人はシベリヤからの未帰還で、二十九才の和子さんは、独りで洗濯屋をやっていました。

ランドリーというほど大きなものでなく、兵舎の兵隊さんを相手の、すすぎ洗濯をやって、貧しく暮らしていたのですが、その夜の十一時過ぎ、表の戸を叩く者があるので、横の窓から覗いてみると、兵隊が立っていました。

「開けてくれ」

というのです。いつも洗濯を頼みにくる顔見知りの黒人兵なので、少しは時間がおそいとは思ったのですが、格別不安も感じず、戸を開けました。

入ってきた兵隊は、何かいいながら、いきなり和子さんに抱きついて、接吻し、からだをすりつけて来たので、和子さんは身体の危険を感じて、とっさにその男を突き飛ばして外へ飛び出しました。

外には二人の兵隊が立っていて、とび出した和子さんはすぐにつかまってしまい、その

ま付近の原っぱへ連れて行かれました。
三人の男に一人の女ではどうする事もできず、和子さんはそこで凌辱されようとしたのですが、その時、道路の方に兵隊の姿が見えたので、大声を出して、
「たすけて下さい……。」
と救いを求めました。その兵隊は忽ち近づいてきました。三人でした。ところがこの三人も前の三人と一緒になって、和子さんを凌辱する仲間に加わりました。こうして和子さんも、結局六人の黒人兵に輪姦されたわけです。負傷はしなかったようですが、六人もの男にいろいろもてあそばれた為、遂に気を失って翌朝まで草原に倒れていたのを、通行人に発見されたのです。
前のヤエ子さんの例とよくにていますが、和子さんの場合は、相手の兵隊が顔見知りであったため犯人は簡単に逮捕され、全部処罰されました。

2　蹂躙された処女たち

草間秀子さん（仮名）の場合

二十才の秀子さんが、お母さんと二人で炭の買出しに行った帰り路、おそくなって九時近くになり、もう真暗になった路を、炭俵を一俵ずつ背負って桜木町から馬車道の方へ歩いていくと、後の方から走ってきた進駐軍のトラックが、二人の横へ近づいてきて止りました。
トラックの運転台には三人の米兵が乗っていたのですが、そのうちの二人がひらりと飛び降りるといきなり一人は秀子さんを捕えて運転台へ引張り込み、もう一人はお母さんを捕えて後方の積荷台へ引きずり上げ、二俵の炭俵もほおり上げて、そのまますぐにトラックは走り出しました。
びっくりして口もきけずにいた秀子さんは運転手ともう一人の米兵の間にはさまれて、動けないようにされていたのですが、車がフルスピードで走り出すと、初めて身の危険を感じて、大声で
「助けて下さい！」
と叫びました。
すると兵隊は、秀子さんを殴りつけ、腕をまわして口をおさえてしまったので、もうどうすることもできず、恐怖のために呆然となって、自動車がどこを走っているのかも解らず、ただふるえていました。

秀子さんの声に、お母さんの方も、
「助けて下さい！　助けて下さい！」
とトラックの上から大声で怒鳴ると、うるさいと思ったのか、先刻の兵隊は、いきなりお母さんを車から突き落そうとしました。
お母さんは突き落され損って、両手でトラックにぶら下っていたのですが、車がカーブをきって横に曲る時、遂に力がつきて地面に投げ出され、気を失ってしまいました。
秀子さんはそのまま連れ去られ、やがてトラックは何処かで止りました。
兵隊は二人で秀子さんをおさえつけ、ズボンを剝ぎ取り、ズロースもむしり取って、下半身を裸にすると、一人の兵隊は車を降り、残った兵隊が秀子さんを腰掛けの上に押倒して、のりかかってきたのです。
もがこうとどうしようと、もうどうする事もできません。秀子さんは処女だったのですから、その時の恐怖、羞恥、そして肉体の苦痛には堪えきれないものがあったろうと思います。
兵隊は、捕えた鼠をもてあそぶ猫のように、身もだえる秀子さんを、かなり長い間にわたって、いろいろにおもちゃにしたので、ほとんど失神状態になってしまい、その兵隊がやっと欲望を満足すると、入れ代りにもう一人の兵隊が来て、また同様の目にあわされ、

最後の三人目の兵隊には、うつ伏せにされて、ソドマイト（獣姦）までされたのですが、その時は苦痛を訴えるうめき声さえ立てられないほどになっていました。
思うさまその野獣的欲望を満足させた三人の兵隊は、それでも秀子さんの血まみれになった下半身を綺麗に拭い、ズロースをはかせ、ズボンも元通りにはかせて、吉野町三丁目の電車停留所付近までトラックで運んで、二俵の炭俵と一緒に秀子さんを街路へ放り出して、去りました。
気を失ったまま倒れている秀子さんは、翌朝その場所で通行人に発見され、すぐ近くの病院へかつぎ込まれたのですが、局部と肛門の裂傷は相当に重傷で、二ヵ月あまり入院しなければなりませんでした。

十八才のS子さんの場合

午前一時という真夜中に、三人のアメリカ兵がS子さんのバラックに侵入してきました。
懐中電燈で照らしながら、広くもない部屋中をひとわたり見廻してから、
「一時間たったら、また来るぞ。」
といい残して出て行きました。何故そんなことをいったのか、解りません。しかし、そ

う宣言されても、警察は遠いので訴えに行くことはできず、逃げ出すこともできず、ただ恐怖に家中の者がおろおろしている中に、やがて三人の兵隊が引返してきました。

二人はピストルを持って戸外に立ち、一人が入ってきて、S子さんのお父さんのHさん（四六才）に

「この娘の年は幾つか？」

と手真似で尋ねました。Hさんは、これは危いと思ったので、本当の年より二つ若くいって、

「まだ十六です」

と手真似で答えました。十六ならまだ子供の部類だし、見のがしてくれるだろう、と思ったからです。

ところが、十六才と聞くと、兵隊はいきなりS子さんをつかまえて外へ連れ出し、三人掛りで泣き叫ぶS子さんの肉体を自由にしました。S子さんは純潔な処女だったし、裂傷のための出血と、傷つけられた心の痛みに、それから以後、かなり長い間入院しなければなりませんでした。

暴風雨の夜の悲劇

R子さんは五九才のお父さんと二人っきりで焼トタン造りの小さなバラックに暮していたのですが、これは十月十日の、例の何とか台風の夜のことです。

夜になってからますます風雨が強くなり、粗末なバラックは今にも吹き飛ばされそうに、大地震のようにぐらぐら動揺（ゆすぶ）られ、R子さんはお父さんにすがりついて、恐怖に脅えていると、午後八時頃、暴風と一緒に表口の戸を蹴破って三人のアメリカ兵がとび込んできたのです。

この三人の兵隊はよほど前から付近をうろうろして、家の中の様子をうかがっていたのかと思われます。

一人は直ぐに戸を閉めて、厳重にシンバリをかっておさえている。一人は懐中電燈を照らしながらいきなりお父さんを殴りつける。そして最後の一人が、恐怖に大きく眼を見開いたまま口もきけないでいるR子さんを、その場に押し倒して、むりやり肉体を犯したのです。

荒れ狂う暴風雨の夜、鼻のつぶれるほど激しく殴られて、血だらけになったまま起き上

ることも出来ないでいる父親の目の前で、十七才の処女が、三人の狂暴な大男のために、かわるがわる肉体を犯されて、苦しさに身もだえ、泣き叫ぶ姿——。

こんな無残なことがあるでしょうか！

病床をおそう

十二月も押し詰った二十九日の夜七時半頃のこと。

Y公園の野外音楽堂の建物に寄せかけるようにして建てた小さなバラックに、T子さんという二十二才の娘さんが一人で寝ているところへ、二人のアメリカ兵が扉を破って入ってきました。

T子さんは盲腸を手術したばかりで、まだ傷痕にガーゼがつめてあり、起き上るのにも苦しんでいる時だったので、兵隊が、

「パンパン、パンパン。」

というのに、手を振って断ると、一人の兵隊は事情が解ったらしく、黙って帰って行きましたが、残った一人はいきなり夜具をまくって、T子さんのネマキの帯を解きにかかりました。

びっくりしたT子さんは、それでもまだその兵隊に、自分が病人だという事が解らないんだろうと思ったので、下着をまくって、手術の痕を見せ、ガーゼの詰めてあるところまで見せて、

「私は病人ですから帰って下さい」と手真似で断りました。ところがその兵隊は、T子さんの肉体を見ると一層興奮したらしく、矢庭に馬乗りになって、抵抗しようとするT子さんを押えつけて、遂に無理矢理その肉体を犯しました。

手術直後でまだ衰弱の回復しきっていないT子さんの肉体が、大男のアメリカ兵の狂ったような欲情の犠牲にされたのですから堪りません。それだけで、半死半生の状態になり、兵隊の立去った後、死んだように夜具の上に倒れていたのですが、驚いたことに、その同じ兵隊が、それから二時間の後、九時半にもう一度やって来たというのです。

抵抗しようもありません。死人も同然のT子さんの肉体を、兵隊は再び思うままに弄びました。正常な心理ではなく、これは明らかに変態心理でしょう。いわゆる屍姦に類する異常なスリルがあるのかも知れませんけれど、そんな変態アメリカ兵の興味の対象にされたT子さんこそ本当にお気の毒だったといわなければなりません。

しかも更に呆れたことは、その同じ兵隊が、さんざんT子さんをオモチャにして帰った後、またそれから数時間後にノコノコやって来たというのです。

しかしこの時はもう朝になっていたので苦しそうに痛みを訴えるT子さんの弱々しい悲鳴と、普通でない物音を聞きつけて、そのバラックの所有主Sさんが駆けつけ、騒ぎ立てて、近くの兵舎(キャンプ)へ報せに行ったので、兵隊はあわてて逃げ出して行きました。

T子さんは神奈川県下A郡の人で、病気の手術の為わざわざ横浜へ出てきて、このSさんの小バラックに一時身を寄せていたのですが、とんでもない災厄におそわれたわけです。むろんその為に病状もひどく悪化して、一時は回復もおぼつかないように伝えられましたが、その後どうなったか私は知りません。

その他

二十六才と二十八才の二人の姉妹を連れた五〇才の両親が、戸塚街道を歩いていて、四人のアメリカ兵に襲われ、ふきんの農家の納屋に連れこまれて凌辱された例。

二十一才の娘と四十二才の母が、主人の不在中三人のアメリカ兵に家に侵入され、裏口から逃げようとするのを殴り倒されて凌辱された例。

二十二才のY子さんと、友達の二十才のT子さんが、夕方五時頃長者町一丁目の電車停留所に立っていると、突然数人のアメリカ兵がやってきて、二人をすぐ近くの兵舎へかつぎ込んで、翌朝六時まで監禁され、T子さんは二人に、Y子さんは四人のアメリカ兵にかわるがわる凌辱された例。

まだ午前中の十時頃に、二十才になるN子さんが、本町通りを歩いていると、通りかかったジープから二人のアメリカ兵が降りて来て、無理にN子さんを誘いこみ、近くの山下町の香港上海銀行の焼残りの地下室へ引張り込んで、かわるがわるにN子さんを凌辱した上、三百円在中のハンドバッグを奪って逃げてしまったという例。

十七才のW子さんと二十才のY子さんが、鶴見の産業道路を通って、臨港道路の白石駅付近を歩いていると、走ってきたトラックから二人の黒人兵が飛び下りて来て、引張り上げられ、そのまま日産重工業内の兵舎へ運び込まれました。これが夜の九時頃のことなのですが、ここで二人の娘さん達が、数人の黒人兵にかわるがわる肉体を弄ばれたことはいうまでもありません。

真夜中の二時頃になって二人は、やっとスキを見つけて逃げ出したのですが、途中でW子さんが何かにつまずいて転び、かすかに悲鳴をあげたのが、二人を探しまわっていた兵隊の一人に見つかり、懐中電燈をつきつけられたのでY子さんはW子さんを残して駆け出しました。

その為、兵隊は反(かえ)ってY子さんを追いかけて行ったので、転んだW子さんはそのまま橋

の下へ転がり込んでかくれ、二時間あまりもじっとそこに身をひそめていました。
やっとあたりが明るくなってから、こわごわ這い出し、近くの交番にそのことを訴えたので、すぐMPにも連絡したのですが、なにぶんにも暗闇と恐怖の為に黒人兵の顔の見わけがつかず、犯人はむろんのこと、Y子さんの行方も遂に分らなくなってしまった、という例。
手許にある私のメモを拾っていくと、こんな例は幾つも出てきます。
しかし、中には機智と勇気で、危いところを巧く切抜けた少数の例もないわけではありません。

肺病患者のふりをして虎口を脱れた娘

夕方うす暗くなった六時半頃、買出し帰りの二十七才と十七才の姉妹が鶴見駅を出てきました。四人のアメリカ兵がこれを尾行してきましたが、いきなり、
「ワイフ、ワイフ」
といって二人の手を握ろうとしたのです。
二人はびっくりしてにげ出しましたが、妹は年も若いし、荷物も軽かったので、人混み

の中にかくれましたが——つまり、まだ人が沢山歩いている時刻なのです。——姉の方はにげきれなかったので、明るく電気の灯がついているNという理髪店へ飛び込んで、救いを求めました。
ところが、店の者は、兵隊の姿を見ると慌ててにげてしまい、姉は四人の兵隊に捕って、床に押し倒されてしまいました。
姉は、とても力では抵抗出来ないと思い、突嗟に、ゴホンゴホンとセキをして、胸をおさえて見せ、
「私は肺病だから駄目です」
といったのです。日本語でいったのですが、意味が分ったとみえて、兵隊たちは急に眉をしかめて立上り、店から出て行ってしまったという例。
伝染病に対しては極度に警戒的なアメリカ人の心理を利用した、聡明な方法だと思います。

相手の舌を噛んで脱れたK子さん

写真材料店に勤めているK子という二十三才の娘の例。
ある日、午前十一時半頃、二人の米兵がフィルムを持って現象を頼みにきました。その

時K子さんが受付したのですが、午後三時頃にそのうちの一人が、別の五人の米兵とまたやってきて、五人の一人が焼付けを頼みました。六時過ぎ、勤めを終えてK子さんが家へ帰ろうとすると、途中でうしろから、

「コンバンワ」

と声をかけられたので、見ると、先刻の黒人兵なので、お客様ですから彼女も愛想よく、

「コンバンワ」

と答えて、歩いて行くと一緒についてくるのです。少し気味が悪くなりましたが、駆け出すわけにもゆかず、足を早めて行きますと、後方からジープが走って来て、彼女を追越して止ったのです。

黒人兵が、ジープの兵隊と何か二言三言話すと、いきなりK子さんの手をつかんで、ジープへ乗せようとしました。にげようとしたのですが、相手は力が強いし、とうとう車の上へ乗せられてしまいました。

ジープは十分ほど走って、人の気配のない真暗な建物の前にとまりました。兵隊は彼女をジープから降して家の中へ連れ込みました。

「あなたの家には電燈がないの?」

と彼女がいいますと、兵隊は彼女を更に奥まった暗い部屋へ引張って行きました。そしてて、彼女のハンドバッグを奪って、手を彼女のズボンにかけましたので、K子さんは初めて身の危険を感じ、

「たすけて!」

と日本語で救いを求めました。

兵隊は彼女を部屋の隅の壁へ押しつけ、左手で口をおさえ、ズボンを引きはがそうとするのです。彼女は兵隊の手からのがれようともがきました。

その中に遂にズボンが裂けてしまったのですが、彼女は靴をはいていましたし、ズボンはスキーズボンで、裾がくびれていましたから、兵隊がいくら引張ってもズボンを取ってしまうことはできませんでした。

そこで兵隊は、かがんで彼女の靴を脱がせようとしました。そのすきに彼女は兵隊を突きとばし、必死になって部屋の外まで逃げ出したのですが、ズボンが足にからまってぐずぐずしている中に、再び兵隊に頸をつかまれて、部屋へ引戻されてしまいました。

「ヘルプ! ヘルプ!」(助けて、助けて、)

と声をかぎりに叫ぶと、兵隊は彼女を再三壁に押しつけて頬を殴りました。彼女がぐったりとなって倒れかかると、髪をつかんで引起し、唇を押しつけ、無理に舌を押し込んできました。

咄嗟に彼女は、必死で相手の舌に噛みつきました。悲鳴をあげ、兵隊が狼狽しているうちに、彼女は部屋をとび出し、家をとび出して危く難をまぬがれた、という例。

実に勇敢によく闘ったものだと思います。人気のない暗い部屋へ引張りこまれ、大男の米兵に暴力で脅かされながら、ついに貞操を守り抜いた二十三才のK子さんは、表彰されて好いと思います。

こういう事が、当時もし新聞に発表を許されていたら、それ以後に起った数々の凌辱事件のうちの幾つかは、未然に防げたのではないでしょうか。

いずれにせよアメリカの母や妻は、こんな残ましい息子や良人の姿を知ってはいないのでしょう。若し知っていたら、あんな平気な顔をしてはいられない筈だ、と思うのです。

しかしアメリカ人ばかりを責めることは出来ないかも知れません。日本人だって知らない事なのですから。

尊敬する良心的劇作家三好十郎さんさえ、読売新聞の「愚者の楽園」で

「日本に進駐したアメリカ兵は、あまり乱暴はしなかったらしい。」

というような事を書いていらっしゃった事もありますし、「群像」で、清水幾太郎、亀井勝一郎、高見順、今日出海などという高名良識の評論家や作家を動員して、ヨコハマのルポルタージュをやった時も、御自分の御書斎でお考えになってきたらしい、「手帳意見」の

ほかには何の発見もなく、いずれも私は大変に失望したのです。

妻を汚され、娘を辱められ、姉を、妹を、母を、アメリカ兵に弄ばれた上に、僅かばかりの財産を奪われ、たった一つしかない時計を取られ、意味もなく殴られ、負傷させられ、時には殺された人間は、ヨコハマには沢山いるのです。直接の被害者ではなくとも、友人に、親族に、知己に、必ず一人や二人はそれにつながる者を持っているのが、ヨコハマ市民なのです。

しかも都市の九〇何パーセントを焼かれ、焼跡をアメリカ軍に接収使用されているヨコハマ市民は、また何らかの形でアメリカ軍につながる仕事をして生きてきたのです。

食糧の問題でも、衛生の面でも、アメリカ軍に救けられてきた事も事実です。うちに烈しい反米感情を隠しながら、尻っぽを振って生活しなければならないヨコハマ市民は、犬よりも卑屈な奴隷かも知れません。

原子爆弾のヒロシマの悲劇は肉体の悲劇です。ヨコハマの悲劇は精神の悲劇です。

私は感情的にアメリカ兵を非難する反米家ではありません。三好さんのいわれるように、アメリカ兵以外の兵隊がヨコハマへ進駐したら、事態はもっと悲惨だったかも知れません。どんな社会にだって悪人はいるのです。少数のアメリカの兵隊だけで、全アメリカ軍を評価しようとは思いません。しかし、理屈はそうあっても、私たちの心に根強く焼付けられ

たこの悲しい怒りを、どうすることが出来るでしょう……(!)

3　最も野獣的なもの

呉や佐世保に起った最近の暴行事件は、被害者が、いわゆる「闇の女」だった、ということで著しく世間の同情を失っているようですけれど、たとえ彼女が売笑婦だったからといって、その為にどんな暴虐も許されてよい、ということはありません。

モーパッサンの作品に似て、それより悲惨な次のような例があります。

焼残った三業地の或る売春宿でのこと。十一月下旬の寒い晩の十二時過ぎ、主人のFさん（四五才）が風呂に入っていると、表道路にトラックの停る音がして、やがて三人のアメリカ兵が、垣根を破って庭へ入ってくるのが、ガラス戸越しに見えました。びっくりして、あわてて居間に引返すと、アメリカ兵は風呂場のガラス戸を壊して、Fさん達の居間へ入ってきました。

部屋には三十二才になる奥さんと、赤ちゃんが寝ていたのですが、これも起上って、赤ちゃんを抱きしめたまま、ぶるぶる震えていると、ハンカチで覆面した一人が、ピストルをつきつけて、主人に

「マネー、マネー」

という。そこでFさんは、壁にかけてあった自分の上衣のポケットから財布を出し、入っていた金の全部六百円を出しました。しかし兵隊はそれでは満足せず、もっと出せ、と今度は奥さんにピストルを突きつけました。

奥さんは震えながら、枕もとに置いてあった木製の金銭函を出して兵隊に渡しました。この中には、その日の女たちの花代や、その他の売上げなど、計千二百三十円入っていたそうです。

兵隊は中を改め、金をポケットにねじ込むと、それで満足したらしく、O・Kとうなずいて、こんどはビールを要求しました。

主人は兵隊を座敷の方へ案内しましたが、この時一人だけピストルを持って、奥さんを見張るために居間に残りました。

二人の兵隊を座らせ、主人は料理場からビールを二本持って来て、台の上に置くと、兵隊の一人がいきなり主人を殴りつけました。ビールが少いというのです。

びっくりして主人はまた料理場に戻り、あるだけのビール、二ダース入りのケースを運んでくると、それで二人は満足したように、ポンポン、ビールを抜いて飲み始めました。

なるべく機嫌を損じないようにして、早く帰って貰った方が安全だと思ったので、殴られて腫れ上った顔を押えながら、主人は一所懸命サービスしました。

やがて好い機嫌に酔払ってくると、兵隊の一人が、手真似で主人に着物を脱げ、というのです。いわれるままに着物を脱ぐと、シャツもサルマタも取れという。躊躇していると、むりやりに何もかも剝ぎ取られてしまい、主人は全くの真裸にされて、

「犬のように、四ッの足で歩きまわれ」

と命令されました。

堪えられない屈辱ですが、仕方がありません。命ぜられるままに、犬のように四ッばいになって座敷を歩きまわり、ワンワン吠えたり、足をあげて小便をする真似をしたりすると、二人はそれを見て、手を叩いて笑っていました。

そのうち突然兵隊の一人が、自分もズボンを脱いで下半身裸になると、いきなり主人に背後から抱きついてきたので、びっくりした主人が、

「ゲイシャ・ガール、二階（アッステア）。ゲイシャ・ガール二階（アッステア）……」

と二階を指していうと、

「ほんとか？（シューア）　O・K。連れて行け。」

というので、主人は二階へ二人を案内しました。

二階には、宵の内から三人のアメリカ兵がそれぞれ女を相手に寝ていたのですが、強盗兵は一つ一つ扉をあけて叩き起し、三人の兵隊と三人の女を、ピストルで脅しながら、隅の一室へ押込んでしまいました。

K子という二十三才になる女、一番大柄で派手な容貌の外人好きのする女を一人だけ呼び出し、主人もその部屋へ押込んで、強盗兵の一人が扉の前に見張りに立ちました。

選ばれて連れ出されたK子は、別に恐れる様子もなく、

「大丈夫です。私巧くやって早く追い返してしまいます。」

と主人にいって、むしろ嬉々として強盗兵に連れて行かれました。

強盗兵はK子を寝室の一つに引張り込んで、彼女の肉体を自由にしたわけですが、むろん彼女はそれを職業にしている婦人なのですから、その限りでは主人もさして不安は感じませんでした。

五分たち、十分たっても別に何の物音もしませんでしたが、そのうち階下の居間の方から、赤ン坊の泣く声がけたたましく聞えてきました。主人は急に妻のことが心配になり出しました。

居間にはピストルを持った見張りの強盗兵が残っている筈です。若し自分の妻に、あの兵隊が……と思うと、いても立ってもいられません。

同じように押込められているお客のアメリカ兵に、
「妻が心配だから、階下へ行って連れてきてくれませんか。」
と手真似をまじえて色々頼んでみましたが、
「自分はピストルを持っていないから駄目だ。」
と首を振って、応じてくれません。
そのうち赤ン坊の泣き声は止みました。
十分、二十分、三十分……とかなり長い時間がたちました。
突然、ガラスを切るような鋭いK子の悲鳴です。主人を初め、一同ぎょっとして顔いろを変えましたが、お互いに顔を見合せるばかりで、どうすることも出来ません。
悲鳴は、間をおいて二度聞えましたが、それから暫くして何の物音もしなくなりました。
強盗兵たちも降りて行った様子なので、そっと扉をあけ、誰も居ないのを見定めてから、みんなでドヤドヤK子の部屋へ行くと、K子は着物も乱れ姿で倒れています。
主人が手を取ってみると、氷のように冷たく、鼻に手を当ててみると呼吸がありません。死んだのか、とびっくりしましたが、お客のアメリカ兵の一人が、脈をみたり、眼をあけてみたり、胸に耳を当てたりして、
「これは、単なる麻酔だ。すぐに覚醒するだろう。私は医師である。心配はない。」

といいました。
十分ほどしてK子は意識を取戻しました。が同時に、
「痛い！　痛い！　苦しい！」
と激しい苦痛を訴えるのです。またびっくりして、医師兵がK子のからだを改めて調べてみると、下半身が出血で真赤に染っているのです。
麻酔薬を注射して彼女を昏酔させ、強盗兵はK子の肉体を思うさまおもちゃにして、最後に獣姦を行ったのです——。
彼女は死にはしませんでした。
しかし、勝利者の名に於て、こんな人間侮辱が果して許さるべきでしょうか？　たとえ、相手が売笑婦であったにしろ！
原子爆弾は戦争中の作戦行動の一つだ、といういいのがれもあるでしょう。繰返していいますが、これは肉体の悲劇です。
しかし、既に降伏した無抵抗の敗戦国民の、しかも何の罪もない無辜の婦人たちに加えられたこの暴虐は、永久に我々の魂に焼きつけられた烙印として、消えることはないでしょう！

第三章　日本娘の運命

以上幾つかの例について書いてきましたが私が知っているのは二十一年三月頃までの、米軍進駐半年間の事件だけで、それ以後は知りません。終戦連絡事務局を退いて、この仕事と縁が無くなってしまったからです。

やめた理由はいろいろありますが、第一は健康上の理由で、何しろろくに暖房装置もない鉄筋コンクリートの、それも一日中陽の当らない北向きの部屋で、背筋にまでしみとおる寒さと、掃除もしないゴミだらけの不潔な空気の中で、一日中、時には夜までタイプライターを打っている事は、四十才をすぎた私には、ひどく身にこたえたのでしょう、とうとう倒れてしまったのです。

医師の診断の結果では、別に恐れていたような呼吸器系のものではなく、単なる過労による疲れだ、ということでしたが、やはり当分は静養した方が良いというので、兎も角も一応退職することにしました。

その事を申し出ると、鈴木局長は、

「まさか進駐軍の方へいらっしやるんではないでしょうね。ここは給料があんまり安いので、その御不満もあるでしょうが、きっとまた出て来て下さいね。」

と残念そうな顔をされましたが、いわれる通り、給料のあまり安すぎることも理由の一つでした。それに官僚的な差別待遇、つまり私のような臨時タイピストは、何時までたっても雇員というわけで、殊に女は待遇がわるく、最初に頂いた月給は、僅かに八十五円でした。

これにはさすがの私もがっかりしましたが、恰度その月給日にウィスキーの特配があったので、金六十円也のトミイ・モルトを一本買って、主人の土産に持って帰りました。まだインフレ以前ですから、物価も安かったのですが、それでも南京街のヤミ市では、おしるこ一杯十円、鳥めし三十円でしたから、私の一ヵ月の労働は、ウィスキー一本と鳥めし一杯でなくなってしまう勘定です。

事件のリストも、前記のように十月末日までの二ヵ月の分は熱心に作りましたが、それ以後は作りませんでした。いくら私たちがやっきになってメモランダムを提出しても、相手はウンともスンとも反響がない。いったい読んでくれているのか、いないのか、あのままくずかごにでも投げ込まれてしまうのではないかと思うと、腹が立ったり、馬鹿々々し

くなったりして、次第に仕事が嫌になってきたからです。
そんな色々な理由が重り合って、終連を退き、暫く家にいましたが、四月に入り少し暖くなり出してから、今度は進駐軍へ勤めることになりました。
遊んでもいられなかったのです。戦災で家も家財も殆ど失ってしまい、主人（たく）（透馬）には仕事がなく、横浜は食糧事情が殊に悪かった為、一時は馬の飼料のフスマのようなものまで食べなければならなかったので、働かなければ栄養失調で夫婦餓死するより仕方がない状態でした。
その時、近所の理髪店の娘さんで、S――の部隊（バタリヨン）に理髪師として働いているA子さんという方が、「ウチの部隊でタイピストを探してますから、奥さん、遊んでらっしゃるなら、いらっしゃいませんか？　給料も悪くないし、食事も三食つくんですよ。」
と熱心に勧めてくれるので、ふと行く気になりました。浅ましいようですが「食事付」というのが、その場合一番に魅力的だったのです。
約束の日に行って、係の将校に逢ってみると、割合に紳士的ですし、給料は日給の計算で一日二十五円。一週間毎に払ってくれる週給制とのこと。ちょっと暗算してみると週六日として百五十円。それに労働者なみにヌレなどという雨の日の特別手当なども付くので、月にすれば、五百円から、まァざっと六百円にはなる。――終連の八十五円に比べればざっと六ヵ月、つまり半年分になる勘定です。

その上、食事は出してくれる、トラックで送り迎えはしてくれる、というのですから、私は夢のような心持がして、正直にいうと、なぜもっと早く進駐軍で働かなかったかと、ついこの間まで「兵隊たちの犯罪」に腹を立てながら仕事をしていた事など忘れてしまったほど有頂天になって、すぐにO・Kして、その日から働くことにしました。
前にも書いたように、家を焼かれてから、磯子の知人の離れを拝借して間借り生活をしていたのですが、すぐ近くの偕楽園という大きな料亭が、終連幹部の人達や、復員局の人達の宿舎になっていたので、そこから毎日事務局までバスが出たので、最初はとても便利だったのですが、そのバスがやがて廃止になったので、磯子から本町まで市電で通うのは、時間にして四十分あまり、しかも当時の殺人的な混雑では、通うだけでエネルギーの大半が消費されてしまう状態で、それも健康を害した理由の一つなのですが、S――の方は極く近くで、電車も混まない、というわけで、トラックなどで送り迎えして貰わなくても、通勤にもこの方がずっと便利なのです。
というように、いわば三つも四つも好条件が重って、新しいこの進駐軍勤務は、私にはほんとに楽しい希望に満ちたものだったんですが……。
仕事は、大体在庫品の明細目録を作る事でしたから楽なものでした。もう暖くなり始め

ているというのに、暖房はあり、兵隊はみんな中学生のように無邪気で親切だし（と初めのうちは思いました。）食事も美味かった。

この食事ですが、当時はフスマにスケソーダラばかり食べていた私たちには、ほんとにびっくりするほど美味しい食事でしたが、これが兵隊の残飯と知った時は、ちょっと淋しい気がしました。

ザンパンといっても、いわゆる上ザンパンで、兵隊の中には食事をしないものがあるので、その分だけが残りますし、また食堂で働いているのは日本人ですから、残りができるようにウンと料理を作るし、というわけで「食べない料理」が沢山残るのです。パンなども両端を切り捨てて、中央だけしか食べないので、少し固いのを我慢すれば、バターをふんだんに使った真白いパンが幾らでも食べられるわけです。

タイピストやメイドや、いずれも戦争中に大きくなった、当時十七八から二十二三の女の子たちが、そのパンにジャムとバターをこってり塗りつけ、その上へまたお砂糖をかけたりして、キャア、キャア騒ぎながら食べ散らしているのを初めて見た時は、呆れるというよりは、何か大変に勿体ないような、申訳ないような気がした事をハッキリ覚えています。

肉も沢山ありました。私も毎日お弁当箱を持っていき、自分に配給された牛肉や鳥肉、ハムやベーコンなどといったものはそれに詰め、パンとコーヒーだけで食事を済ませて、

あとは家へ持って帰り、良人（たく）と一緒に夜の食事の時にそれを食べたりしました。——悲しいようなそれも懐しい当時の思い出です。

部隊に働いていた娘たちも、多かれ少なかれ、みんな同じような状態にあったんだ、と思います。そのことを知っていないと、あの娘たちの色々なその後の動きや、たどった路の、本当の意味が理解できないのではないかと思います。

部隊には日本の男の人たちも沢山働いていました。前記の食堂（調理場）のコック、通訳、少数の書記の他に、何百人もの労務者たちですが、この男の人たちは、私たち女とはハッキリ区別されていました。

男と女が性別で区分けされている、という意味ではありません。ハッキリと身分が違うのです。いってみれば、男は敗戦日本人ですが、女の方は半分ぐらいはアメリカ人なのです。前記の食事の場合がそれで、たとえ残飯にしろ、配給して貰えるのは女だけですし、門衛の哨兵（セントリー）に、出入りの厳重な身体検査をされるのは男だけ。

私は最初甚だ迂闊にも、これがアメリカ人の文化的な女尊男卑主義からくる習慣的なものだと思っていました。

その間違いはすぐ分り、自分の迂闊さと愚かさを間もなく教えられましたが、彼等は女性を尊敬する文化人どころか、女性のすべてをその性的対象とだけ考え、部隊に働いてい

る日本の女は、すべて彼等の為に用意された常設的娼婦だと考えている、恐るべき野蛮人どもだったのです。

食事はその餌であり、親切そうな態度は、動物を手なずけるためのテクニックだったにすぎないのです。

部隊は、以前に飛行機工場だったものを接収したのですから、敷地は広いし、到るところに、彼等にとっての「便利な場所」がありました。

私は部隊本部の建物から少し離れた、倉庫の中の事務室で働いていたのですが、工場にはそれぞれ現場事務所があり、チーフの下士官はその部屋にベッドを入れて寝泊りしているという具合ですから、そこで働くメイドやタイピストは、まるで檻に入れられた小動物も同じことです。

そういう条件の下で、そんな場所で、毎日毎日兵隊に口説かれていれば、若い娘などどんな利巧そうで、シッカリしているように見えても、長い間には抵抗しきれずに兵隊の自由になってしまう。

いずれ、そうなることの分っている「檻の中の可愛いい小動物」ですから、兵隊だって無闇に暴力をふるうような、馬鹿な真似はしません。ジワジワやりながら、むしろその効果を楽しんでいるわけです。

いってみれば精神的強姦ともいうべきで、この方が一人の純真な娘を、何時か本質的に娼婦に変えてしまう、という意味で、暴力による強姦よりは遙かに悪質で、罪深いというべきではないでしょうか。

私が部隊に入って最初に不審に思ったことは、働いているタイピストやメイドの中に、名古屋生れの娘がいることでした。

この部隊がもと名古屋にいて、最近横浜へ移ってきたのだ、と聞いた時、初めてその秘密が分りました。その娘たちは、名古屋でこの部隊に入り、やがて部隊の誰彼とそれぞれ特別な深い関係になって、離れ難くなり、部隊の移動と共に、彼を追って家をとび出してきた、つまり「モロッコ」のアミイ、ジョリーだったのです（！）

ですからむろん移動証明など持っていませんから、軍の食事に依存するより仕方なく、あとはヤミ生活だからお金がかかる。というわけで、女だけ食事が付き、男たちに比べて遙かに高額の給料が、二十才にもならない小娘の労働（？）に支払われていたのです。

私は、いわばその余徳にあずかっていたにすぎない、と分った時、さすがに苦笑しないわけにゆきませんでした。気をつけて見ると、娘たちは、暇さえあれば兵隊に抱きついているし、誰が誰の恋人を奪ったの、手を出したの、出されたの、とさながら魔窟の娼婦部屋にでもいるような、そんな会話ばかり交わして朝から晩まで、泣いたり笑ったりしてい

るのです。私だけが、たった一人の他国者の異端者だったわけですが、幸い、そんな娘たちとは遙かに年齢も違うので、そんな点でも競争意識を持たれなかったせいか、目の敵にもされず、排撃もされず、全然別ものとして仲好くやっていけました。

しかし、兵隊の誘惑は、間もなく私の上にも手をのばしてきました。

私はもう四十女ですし、良人もあることは初めにちゃんと断ってあるのに、年若い二十代の兵隊が、憶面もなくお前は綺麗だの、お前を愛しているのと口説きにかかってくるんですから、考えようによっては大いに光栄の至りでした。

新しい女が入ると、用もない兵隊たちがオフィスへ入れ代り立ち代り出入りして、女の品さだめをやっていました。お女郎屋だったら、さしずめ「初見世」とでも張り出すところです。

前にもちょっと書きましたように、私は十八の時からタイピストをやって、外国商館を渡り歩いてきた女です。アメリカ人がどんな風に口説くか、フランス人がどんな風にいい寄ってくるか、イギリス人は、ドイツ人は、と彼等の常套手段は知りつくすほど知っています。一つの会社に長く勤めていられなかったのは、実はその為もあって、口説やら誘惑はどんなにしても身をかわすすべもあるのですが、その為に同僚がうるさく騒ぐし、社内でも何となく気まずい空気になるので、何時も、「ああ又か」とゆううつになりながら、社

をやめなければならないことになるのです。もっとも、その時には大抵次の会社から、

「こっちへ来ないか。」

というような話があるので、あぶないなと思いながらも、面倒臭いのでその会社へ移ってしまうからいけないんですが。

兎に角そんなわけですから、テキサスやミネソタの田舎者なら、いいえ、それがニューヨークの下町ッ子と称する粋な若者にしたところが、そんな誘惑を巧妙にそらすぐらいのことは、私にはわけのない事です。

しかし、戦争中に育った若い娘たち、白人に対して何の予備知識もない純真で無邪気な娘たちだったら、食物と親切と、その上この口説き上手にあったら、遂フラフラっとして身を誤ってしまうのも、全く無理のないことだな、とつくづく思いました。

何しろ一人の兵隊がメイドをつかまえて、おおっぴらに接吻している。時には他の兵隊の女で、嫌がるのを無理に接吻する、というような場面を他の兵隊が見ても、

「ようよう、うまくやってるな。」

というようなことをいって囃し立てているし、日本人従業員にいたっては、それ以上の場面に行きあわすことがあっても、まったく知らぬ顔の半兵ェというか、ぜんぜん無関心をよそおっております。

私に対する誘惑は段々執拗になり、露骨になってきました。
「あの女はひとすじ縄ではいかないぞ。」
というようなことが、GIの間で評判になり出したようで、そうなると、
「よし、俺がモノにしてみせる。」
といって自分から乗り出してくる色男気取りの嫌な奴が必ずどこにもいるものです。
「私はお前さんのママと同じぐらいの年齢よ。」
といったって、本当にはしません。
「俺はそんな女が好きなんだ。」
というようなことをいって、暇さえあればつきまとってくる。
これは不可(まず)いな、と思いました。昔の外国商館の時と違って、相手は兵隊で気が荒いし、大きな工場のどこでだって、暴力を使う気になれば女ひとりを自由にする場所はあるし、というわけです。
「もうこの部隊に長居はできないな。」
と、これは経験で分ります。
どうせ近い内にやめるんだ、と心をきめてからは気が楽になりました。ものやわらかに要領よくあしらうなんて態度は止めて、ビシビシ手ひどく挑ねつける。

こうなると、仕事の上でいじめにかかってくることはどこへ行っても同じこと。
「お前の仕事は出鱈目だ。」
と、事毎にケチをつける。もともと文句をつける為の文句なのですから、こっちにもいい分はある。ビシビシと遠慮なくやっつけるから、ついに衝突して、
「お前のような乱暴女(ラフ・ウーマン)は解雇だ。」
とあっさりクビにされたのが、五十日目。オフィスの通訳さんが心配して、その前から私に、
「私たちは敗戦国民なのだから、なんでも我慢ですよ、我慢ですよ。」
と注意してくれていたのですが、そんな卑屈な考え方などクソ食らえといった勢いでしたからたまったものではありません。一ヵ月と少ししか勤めなかったわけですが、この経験は貴重でした。
その五十日の間に、軍の編成が戦時態勢から平和態勢に切り換えになったので、色んな支給(サプライ)がひどく面倒になり、食事も厳重になって、本当に兵隊の食べ残しみたいなものしかくれなくなりましたから、その意味からいえば、やめ時だったかも知れない、と敗け惜しみかも知れないが、思っています。
その後、終連の方からの話で、進駐軍のクラブで女子従業員たちの指導監督を担当する

シャペロンを探しているから、是非行ってくれ、というので、D――というクラブへ勤務することになりました。

Y公園の一角にあった、焼残りの立派なビルディングで、兵隊たちの為に、絵を描く部屋、写真現像の部屋、図書室、カード室、ビリヤード等々、色んなホビイ（趣味）のための施設がそろっていて、喫茶室はありますが、酒場はなく、スナックバーで、お菓子とコカコーラ、軽い食事などを売るだけなので、兵隊もおとなしく、女の子たちも、兵隊と問題を起すようなものは、あまりないようでした。

ただ、当時のY――公園が、いわゆるパンパン・ガールの巣でしたので、昼といわず、夜といわず、焼残った樹立の蔭で、商売をするのが女の子の控室から、まる見えなのには弱ってしまいました。

何しろ昭和二十一年の夏頃ですから、パンパンといっても「下駄ばきの天使」たちで、汚れきったブラウスに、古カーテンを巻きつけたようなスカート、下駄ばきかサンダルのつっかけで、そんな女たちが兵隊を相手に、所嫌わず地面の上にゴロゴロに転って商売をしていた頃ですから、不潔とも何ともいいようがありません。

そんな醜態を眼の前で見せつけられているためか、クラブの女の子は兵隊と仲好くすることをあまり喜ばず、かえって同じ職場に働く日本の青年たちに好意を持つようでした。

このクラブにも、その後、女の兵隊が入ってきて、殊に黒人婦人兵がクラブのスタッフに入ってからは、私も仕事がなにかとやり難くなり、九月に、恰度その頃開設されたばかりの極東米軍映画配給部（FECモーション・ピクチュア・サービス）に移りました。

これは日本全土の米極東軍の各部隊へ慰問用の映画を配給する仕事で、直接国防省に属する事務局で、映写機の修繕技師や、フィルム・チェッカーや、日本の従業員を沢山使っているので、最初はタイピストで入ったのですが、後には日本人従業員のパーンネル・マネージメントをやる事になって、支配人（マネジレス）になりましたから、GIよりは日本の官庁などとの接触が多くなり、あとは映画ばかり見て暮していたので、この横浜オフィスが閉鎖になるまでの四年間は、別に不愉快なこともありませんでした。

外国商館に勤めていた頃からもそうですが、殊に米軍に勤務して感じたことは、やはり日本の女性が社交上で全く訓練されていないことです。仕事の上のことでも、イエス・ノーをはっきりしないし、主張すべき事も主張しない。

進駐当初は兵隊だって、乱暴は乱暴なりに多少のエチケットは持っていたんでしょうが、これが日本の女と接触しているうちにすっかり失ってしまいました。結局日本の女がナメられてしまったのでしょう。

どんな乱暴な男でも、アメリカ人が女を殴るなどということは決してないのですが、こ

れが近頃は平気になり、アメリカ本国までも流行するようになったとか。これは確かに日本の女性がアメリカの男性をスポイルしたんだと思います。

二十一年の夏、夜九時頃横浜市電で、私が兵隊と乗合せました。当時は酔払ったGIが意味なく窓ガラスを叩きわったり、乗客の男子を一人ずつ殴ったり、車掌さんが殴り倒された上に蹴られて半殺しにされたり、というようなことが毎日のように起っていた頃です。

何かの会の帰りで、私は良人と一緒だったのですが、夏だったので白いブラウスに、ジャバ更紗のスカート、それに大きなアケビ製のボンネット風の帽子をかぶっていたのです。どうせ、アメリカの田舎者みたいな服装ですが、隣りに座っていた兵隊が、その帽子を持上げて、私の顔を覗き込むのです。

ここで一言いいたいことは、私の経験で、きちんと日本のキモノを着て歩いている時は、絶対に兵隊たちから「ピーッ」と口笛を吹かれたり、みだらな呼び掛けを受けたことがありませんが、洋装ですと時々追いかけられたりすることもあります。多分、日本の帯をしめた姿は彼等には武装をしているように見えて怖いのでしょう。もう一つには、どんな田舎娘風のかっこうでも、一応洋服を着ていれば、彼等には「おいらのミイちゃん、ハアちゃん」として近親感が持てるのかも知れません。アメリカ風のニュールックなどで歩いている娘さんを見ると、趣味の悪さなどは別にして、

「兵隊さん、私を誘惑してよ。」

とデモンストレーションしているように見えて、私はヒヤヒヤしてしまいます。

話がわき道へそれましたが、その電車の中で顔を覗き込んだ兵隊を、私は嫌な奴だなと思ったのですが、軽く避けていると、ますます執拗にからかってくる。

それに良人もやっと気づいたらしく、暫く黙って見ていましたが、あまりしつこいので良人がそれをとがめました。

「彼女は僕の妻である。失敬なことをするな。」

ふだんは温順しいのですが、すこし酔ってもいたので、ちょっと悪い言葉を使って、烈しくいったのです。

兵隊はびっくりしたような顔をしましたが、それでも直ぐにやめました。ところが、私たちはそれで済んだと思っていたのですが、間もなく乗換場へ来て電車を降り、反対側の少し暗い停留所の方へ歩いて行くと、後から大きな兵隊が三人、大股で追いかけてくる。見ると、一人は先刻の男です。

これはあぶないな、と気がついた時は、もう取囲まれていました。電車の中では、たいして大きいとも思えなかったのですが、向い合って立つと、見上げるような大きな男でした。

その男が、良人に向って、

「真珠湾を忘れるな！」
といったかと思うと、拳闘の手で殴りかかってきました。
とっさのことで、良人は巧く避けきれず肩のあたりを突かれて、引っくり返りました。
かっとなった私は、
「広島を忘れるな！」
飛び上るようにして、いきなりその男の頬を平手でひっぱたいてやりました。
後で考えると随分無鉄砲なことをしたものだと、ぞっと身ぶるいが出ますけど、その時はまるで夢中でした。何しろ相手が大きいので、ほんとに飛び上るようにして二つひっぱたいたのです。
パン、パン、と気持の良い音がしましたが、相手にとっては蚊が食ったほどにも感じなかったでしょう。平気な様子でしたが、私がじっと睨みつけながら、
「恥を知れ！」
と怒鳴りつけると、とたんに照れ臭そうに首を振って、後の二人と一緒にこそこそと立去ってしまいました。
良人は肱を少しスリむいただけで、大した怪我はありませんでしたが、若しあの時、良人が立向ったりしたら、半殺しにされていたでしょう。女には手出しをしなかったところは、やっぱりアメリカ人だな、とその時は、ちょっと感心しました。
しかし、こんな事もあの当時だからできたのです。それから以後、すっかり日本の習慣を知りつくしてしまった、いわば日本ズレしてしまったG・Iたちは、平気で女を殴るようになりましたから、もう二度とあんな事をしようと思いませんが。
いずれにせよ、日本の女性にも多少の責任はあったといえるかも知れませんが、アメリカ兵がこの国に駐留する限り、日本の女たちの不安は決して消えることはありますまい。日本の歴史始って以来の、不幸であり、悲劇であることに間違いはありません。